

# 竹端ゼミ3年生プロジェクト『ありのままに生きるとは？』

## ～「セクシュアリティ」と「らしさ」の問い直しから～』

加來夏帆 金地花恋 狩谷実奈 永山みのり 吉田雄馬 竹端寛  
(社会デザイン系 竹端ゼミ)

1. 社会的背景・プロジェクトの経緯
2. 自分たちの学びと考えを深める場
  - 2-1. 竹端ゼミ3年生プロジェクト『ありのままに生きるとは？』  
～「セクシュアリティ」と「らしさ」の問い直しから～』
  - 2-2. 「多様な性のあり方ーLGBTQ+の理解を深める講演会ー」への参加
3. 深めた考えを社会に伝える場
  - 3-1. 環境人間学フォーラムでの発表
  - 3-2. 「地域コミュニケーション論」のゲスト講義
4. 学んだこと・今後の課題
5. プロジェクトメンバーのコメント
6. ゼミ教員から

### 1. 社会的背景・プロジェクトの経緯

#### 1-1 社会的背景

昨今、性の在り方（セクシュアリティ）についての議論が活発になっている。マスメディアやNPO、団体等の活動により「セクシュアリティ」「ジェンダー」「LGBTQ」といった言葉は広く認知されるようになった。そうした性の在り方が注目された背景として、「性的マイノリティへの差別・偏見」の問題がある。具体的には「周囲にカミングアウトすることによる人間関係の悪化」や「同性婚が認められない制度上の問題」等である。これらの差別・偏見が引き起こされる原因の一つとして、性的に「多数派」である人々は「少数派」に対して理解が不足していることが挙げられる。「男らしさ・女らしさはこうあるべきだ」という価値観は、多様なセクシュアリティの理解を困難なものにしてしまう。

#### 1-2 プロジェクトの経緯

上記の社会的背景から、今回のプロジェクト実施の経緯を記述する。プロジェクトの話が出たのは2021年7月頃で、ゼミの活動中でのことだ。竹端ゼミでは輪読やゲストの講演を通して「自分の中の疑問・モヤモヤを発見し言語化する」ということを重点に置いている。私たちは半年間のゼミ活動の中で、自分の内なる偏見や社会への違和感に気づき、問題を「自分事」として捉えられるようになった。ジェンダーやセクシュアリティを自身と関連付けることにより、そうした問題は自分と切り離されるものではないと気付いた。この気づきをより多くの学生に体験してもらいたい、

またそうすることでゼミ生の学びもより深めることが出来るのではないかと考えたのがプロジェクト開始のきっかけである。

プロジェクトの打ち合わせは8月頃から本格的に始まり、夏休みの間はZOOMでのオンライン会議を中心に言い、休み明けからは対面での打ち合わせも実施するようになった。議論のテーマについては夏休みの打ち合わせにてゼミ生で話し合った。性的マイノリティ、ジェンダー格差や性教育などの意見が出たが、それらの問題に共通していたのが「性」というキーワードであった。

打ち合わせの段階では、社会的背景にある「性的マイノリティへの差別・偏見」を学生に問い直してもらい、「多様なセクシュアリティの理解」「セクシュアリティ問題の自分事化」を促すプロジェクトにする方向へと議論を進めた。話し合いの結果、プロジェクトのテーマは「セクシュアリティ（性の在り方）と自分らしさ」に決定した。そしてこのプロジェクトを起点として、環境人間学フォーラムへの参加やゲスト講義の実施、性の多様性がテーマである講演会の参加へと様々に展開していった。

テーマは「セクシュアリティと自分らしさ」であるが、私たちは学生たちと共にどんな目的意識を持ってプロジェクトに臨みたいかを考えることにした。話し合いの中で「男／女らしさの価値観が〇〇な状況ではしんどく感じる」「セクシュアリティは自分らしさの中の一つ」という声がゼミ生の意見から出た。そこから私たちはこのプロジェクトの目的として、「男と女に縛られず、『自分の在り方

や生き方を主体的に選び取れる社会』について考える」ことを掲げた。環境人間学部のすべての学生を対象とし、90分のグループワークを全3回行った。2021年11月から同年12月にかけて行い、企画・宣伝・運営については学生主導で行った。活動を進める中、プロジェクトと並行してゲスト講義の実施や性の多様性に関する講演会への参加など、「性」について考える機会が多くあった。プロジェクト以外のイベントについては後述するが、そうした機会はプロジェクトの内容をより充実させるものであったといえる。

### 1-3 報告書の全体構成

本報告書の項目分けについては、プロジェクトやそれに関連する様々なイベントが「私たち学生にとってどのような場であったか」という点に基づき整理した。そのため、時系列順に述べたものではないことを念頭に置いていただきたい（時系列については以下表1参照）。2節では「自分たちの学びと考えを深める場」として①ゼミのプロジェクトと②学部内で行われた性の多様性についての講演の内容を記述する。3節では「深めた考えを社会に伝える場」として①環境人間学フォーラムへの参加と②ゲスト講義の実施について記述する。4節では、プロジェクトやそれ以外の活動全体を通して私たち学生が「性」に対してどんな学びがあったのか、どんな課題があるといえそうなのかをまとめる。

8～10月	プロジェクトの打ち合わせ
11月4日	環境人間学フォーラム発表
11月10日	プロジェクト実施（1回目）
11月16日	性の多様性を考える講演会への参加
11月17日	ゲスト講義の実施
	プロジェクト実施（2回目）
12月1日	プロジェクト実施（3回目）

（表1）プロジェクトや各イベントのスケジュール

## 2. 自分たちの学びと考えを深める場

2-1. 竹端ゼミ3年生プロジェクト『ありのままに生きるとは？～「セクシュアリティ」と「らしさ」の問い直しから～』

### ①プロジェクトの概要と目的

このプロジェクトは、多様なセクシュアリティについてゼミ生が参加者に「教える」のではなく、共に「学び合う」スタンスを大切にし、堅苦しくない議論の場を作りたいというゼミ生の思いから実現した。普段友達や家族と話す機会の少ないセクシュアリティに関する話題について自分の考えを言語化し、様々な人の考えを聴くことで新たな視点を得ることを目的とした。環境人間学フォーラムやゼミ紹介の場を利用して宣伝を行い、発表に共感してくれた1～4回生の学生が当日参加をしてくれた。

環境人間学部の学生を対象とし、90分のグループワークを全3回行った。まず第1回ではマイノリティの存在に目を向け、性の多様な在り方を知った。次に第2回では自分の在り方を見つめ、第3回で違う価値観のあなたとわたしが共に生きるにはどうしたらよいかについて、自分の考えを言語化し合った。全3回構成にすることで、他者と自分それぞれの在り方を丁寧に見つめ直すことが出来ると考えた。そしてセクシュアリティに関する話題は誰もが当事者であることを知り、お互いをより尊重し合えるようになることを目標とした。

### ②各回のテーマと詳細

#### ・第1回 多様な在り方を知る

マイノリティの存在に目を向け、性の多様な在り方を知る事を目的とした。参加者は3回生3人、2回生5人の計8人。前半では「自分らしさ」の一つとしての「セクシュアリティ」について、恋愛指向や性的指向の観点も含めて幅広く学び、トランスジェンダーを公表している有名人を例に挙げてセクシュアリティの揺らぎや葛藤について議論を深めた。後半では、マイノリティの人々の日常生活での困りごとを年代ごとに学び、性別にとらわれない生き方をしている芸能人を例に挙げ、自分らしさについてそれぞれの意見を言語化した。

#### ・第2回 自分の在り方を見つめる

自分のセクシュアリティや「らしさ」について振り返り、自分の在り方を見つめることを目的とした。参加者は3回生2人、2回生6人、1回生1人の計9人。前半ではワークシートを用いて幼少期からの自分の好きなものを振り返り、他者と比較しながら「自分らしさ」について考えた。後半ではanone<sup>(1)</sup>を用いて自分のセクシュアリティについて理解を深めた。

### ・第3回 他者と共に生きる

自分らしさを大事にしつつ、他の人の「らしさ」も大切にする方法について考えることを目的とした。参加者は4回生1人、3回生2人、2回生1人、1回生1人の計5人。前半では他者と価値観がずれていた時、関わらざるを得ない人とそりが合わないときどうすればよいかについて意見を交換した。後半では「身近な人に告白されたら？」というテーマで、気持ちの伝え方やアウトティング問題について議論を深めた。

#### ③参加者の感想

参加した学生からは、プロジェクトで議論した内容に関して、「自分が好きな自分嫌いな自分、丸ごと含めて個性として自分を受け入れたいと思った」「ストレートの人も無関係じゃないから、SLGBTQって言ったらいいのに」など、興味深い感想が多数寄せられた。またプロジェクト全体の感想として、「授業とはまた違った学生の自由な議論の場というのは貴重でありがたかった」「当事者との関わりがあった人が意外と多くて驚いた。特別な話じゃなくて、全然近くにある話なんだと改めて感じた。」などの意見が寄せられた。

(1) 2,000通りもの組み合わせから自分に近いセクシュアリティを分析してくれるサービス anone, <https://anone.me/>



(図1) プロジェクト第2回の様子  
(出所) ゼミ生 吉田撮影

#### 今回の目的

自分はどんなセクシュアリティを持ち、何を大切にしたいのかを振り返ろう！

✖ 教える

○ 学び合う

#### 気を付けてほしいこと

- ①相手の話をしっかりと聞くこと
- ②考えに理解を示す。尊重の気持ちを持つこと
- ③言いたいこと/言いたくないことの線引きをする

(図2, 3) プロジェクトで使用したスライド  
(出所) 竹端ゼミ

#### 2-2. 「多様な性のあり方ーLGBTQ+の理解を深める講演会ー」への参加

##### ①講演会の概要

11月16日、乾美紀先生の文化社会調査法演習という講義の一環で、「多様な性のあり方ーLGBTQ+の理解を深める講演会ー」があった。「多様な性のあり方」というテーマや、「共に学び、共に考える」という点でプロジェクトと重なる部分があったため、ゼミ生から4名が参加した。当日は、特定非営利活動法人Mix Rainbow<sup>(2)</sup>から当事者である3名のゲスト講師が来てくださり、LGBTQ+フレンドリーなキャンパスづくりについて共に考えた。前半は、多様な性についての基礎知識、講師のこれまでの経験・体験についてお話を伺い、後半は、3グループに分かれて、それぞれ講師の方に直接質問をさせていただいた。

(2) : <https://www.mixrainbow.jp/>

##### ②印象に残った話・得た学び

お話を聞く中で、講師3名もこれまでの境遇や人生が変わったきっかけ、今の考え方などそれぞれ異なり、まさに多様なあり方を実感できた講演会だった。その中でも印象に残ったのは、周りの環境(家族・友達・学校の先生の理解)が生きやすさに大きな影響を与えるということだ。小さい頃から周りの理解があったため、自分らしく過ごせていたという方もいれば、いじめられた経験があり、本当の自分を表現するのに時間がかかったという方もいた。「私には関係ない、私の周りにはいない」が多くの人を苦しめている。私も心のどこかにそういった思いがあり、無意識のうちに人を傷つけていたと気が付いた。無意識であっても、誰かの「らしさ」を潰すようなことはあってはならない。誰もが自分らしく生きやすい社会を目指すには、「他人事」から「自分事」に捉え直し、共に考えていく必要があると改めてわかった。

### ③プロジェクトとの繋がり

プロジェクトを進めていく中で、自分たちの目指すところとやっている内容が合っているのか、これでいいのかという小さな不安があった。また、プロジェクトのキーワードでもある「らしさ」についても、上手く言語化できておらずモヤモヤしていた。そこで、グループワークでは「らしさ」についてお話を伺った。まとめると以下の2つである。

- ・相手の「らしさ」を尊重するには、まず自分自身の「らしさ」を大切にすることが大事。すると、自然と他者の「らしさ」に気づき、尊重できるようになる。

- ・「らしさ」は流動していて、完成形はない。その時その時の自分らしさに向き合うことの積み重ねで、ふと振り返った時に「自分らしさ」が見える。

1つ目の話は、自分たちの目指すところと一致しており、プロジェクトはその過程の一步目であるとわかった。また、自分たち以外の人からこの言葉を聞いたことで活動に自信を持つことができ、伝えたいことの再認識にもなった。2つ目の話については、「らしさ」を大きく考えるのではなく、その場その場で意識していけばいいという言葉聞き、漠然としていた「らしさ」が少し具体的になった。難しく考えても一度で答えは出ない、だからこそ、「自分らしさ」とは何か考え続けていくことが大事だとわかった。プロジェクトをやる中でも、自分らしさを考えていくことは大事だとわかってはどう向き合っていけばいいのか、という問いが出てきた。そこで、講演会で聞いた「らしさ」の捉え方を自分たちなりに紹介することで、参加者にも上手く伝えることができた。

講演会を通して、多様な性についての知識を深めるとともに、プロジェクトで伝えたいことの再認識、そしてそれを上手く言語化するきっかけになった。また、共に学び、共に考えることで、「他人事」から「自分事」に近づくということを実感し、プロジェクトもそんなきっかけを与える場にしたいと思った。

## 3. 深めた考えを社会に伝える場

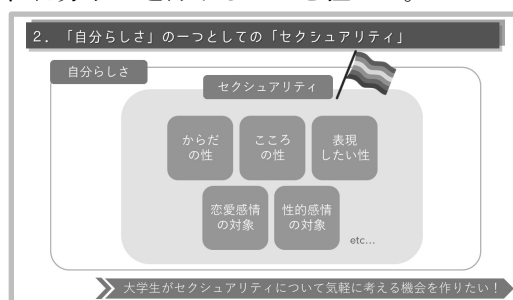
### 3-1. 環境人間学フォーラムでの発表

環境人間学フォーラムの実施時期には、プロジェクトは未実施で構想段階にあった。そのため、私たちはこのフォーラムを「活動紹介と宣伝の場」と位置付け、プロジェクトの理念や目標について発表することにした。

環境人間学フォーラムは学部での主要行事であるため、他学年や他系の学生にプロジェクトを知ってもらいたい機会であった。そこで、

発表での大きな目標は「自分は関係ない」と思っている人にも当事者意識を芽生えさせることとした。聴衆がLGBTQやダイバーシティに関心を寄せているとは限らず、またその用語などもよく知られていないことも想定し、できるだけ身近な例を挙げるように意識しつつ発表を構成した。

特に力を入れて説明したのが、セクシュアリティを自分らしさの一つと捉える私たちの考え方だ。下図のように、セクシュアリティを構成する基本的な要素を簡単な言葉で表した上で、関連する例として「表現したい性」は「好みのファッション」、「恋愛又は性的感情の対象」は「フェチ」といった、学生にとってポピュラーな話題を挙げた。セクシュアリティを誰もが一度は友人などと話したことがあるようなテーマだと捉え直すことで、性的マイノリティでなくても人それぞれ違ったセクシュアリティを持っている、「自分らしさ」のようなものだというイメージを共有し、自分事に近付けることを狙った。



(図4) フォーラムで使用したスライド

(出所) 竹端ゼミ

発表後に届いた感想文の中には、「性の多様性というテーマに関心がある」というコメントが多く見受けられた。学生の間では、それだけ関心が高まっている分野なのだろう。多くの人が注目してくれたポイントは、身近な例を挙げながら「セクシュアリティ」を「自分らしさの一つ」と説明したことに関するコメントだった。その一部を以下に引用する。

- ・「セクシュアリティはLGBTQなどの人を対象にしていると思っていたが、私たちも対象に入っていると知ることができた」
- ・「LGBTの方々に関わらず自分にも大に関係する話なのだと聞き入ることができた」
- ・「自分らしさを考えていくことで他人に対してもより良い接し方ができるのではないか」

このように、「セクシュアリティ」や「性の多様性」といった言葉が、性的マイノリティなど一部の特別な人だけの話題だという感覚でいた人は多いようだ。また、「他者のセクシュアリティを理解することは大事だけれ

ど、それ以前に自分のセクシュアリティについて考えたことはあまりなかった」というコメントも少なくない。こうしてプロジェクトの紹介したことが、たくさんの人に自分の在り方や、マイノリティに対する向き合い方を再考してもらったきっかけになったのであれば、喜ばしく思う。

このフォーラムでの発表は、発表・研究の完成度を評価され、「ゆりのき会賞」を頂いた。ただ、フォーラムではプロジェクトの特色である「学生のみで行う」「一つの答えを導くわけではない」「話す・話さない、のラインは自分で決める」といったことを伝えきれなかった点は悔やまれる。「セクシュアリティはプライベートな話題も含むと思うので、親しくない人と話すのは不安だ」というコメントもいくつかあった。やはり、性に関する話題を扱う上では、「安心して話せる場かどうか」という点は特に重要視される要素だと言えるだろう。こうした反省点は、フォーラムの後に行ったプロジェクト各回で、「安心して議論するために気をつけること」として参加者に提示する形で活かすことができた。

### 3-2. 地域コミュニケーション論ゲスト講義

2021年11月17日（水）、「地域コミュニケーション論」内の50分間で、環境人間学部2、3回生計55名を対象に発表する機会があった。前述の環境人間学フォーラムに参加するにあたり、運営の井関崇博准教授から、発表内容とプロジェクトに関するご意見をいただいていた。それから派生し、井関准教授が担当されている講義で、話をさせていただくことになった。今年の地域コミュニケーション論のテーマは「ダイバーシティ」や「SDGs」ということで、ゼミで「性の多様性」について研究しているならぜひ、ということだった。

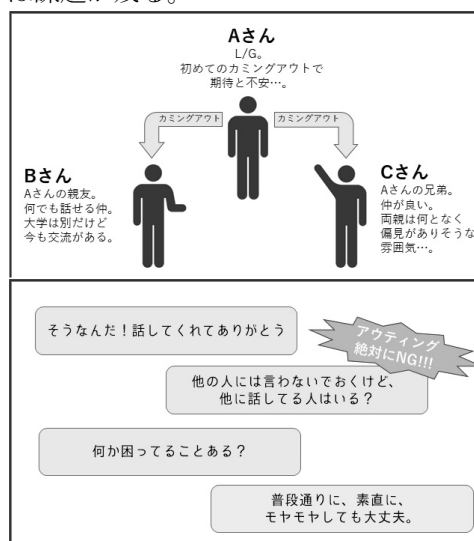
この授業は、環境人間学フォーラムやプロジェクトと大きく異なる点が二つある。プロジェクトやフォーラムでは、結論を求めずモヤモヤする過程を重視した。一方で、授業の一コマにおいては明確なゴール設定とそれに至る方法論を提示する必要があった。また「らしさ」や「セクシュアリティ」の問題に積極的には関心がない人・初めて聞く人も多くいた。そのため、馴染みや問題意識が薄く、自分事として考えてもらいにくいと予想した。

その対策として、プロジェクトでは実施していない「身近な人からセクシュアリティについてカミングアウトをされたら」という場面を設定したロールプレイを、授業のメインとして行った。ロールプレイは 計15分で行った。3人1グループで、A役（L/G当事者）、B

役（Aの親友）、C役（Aの家族）に分かれ（図5）、それぞれの立場から、カミングアウト時において自分ならどんなアクションを起こすか、どう受け止めるか、どんな反応が返ってきてほしいかについて考えてもらった。ロールプレイ終了後は、ゼミ生で用意しておいたアクション例（図6）を一つの解答例として紹介し、アウティング問題についても言及した。

受講者からは、「まずは一人一人を知ることが大切なんだと思った」「相手によって言っても大丈夫なこと、ダメなことが違うため、確信しながら関係を作ることが大切だと学べた」「私も気を付けようと思う」という感想をいただいた。

しかし、セクシュアリティ問題に関心がない人や初めての人にも分かりやすいように工夫できたと評価できる一方で、本来は複雑な要素が何重にもなっているのに、分かりやすさ・取っ付きやすさを優先するためにそれを簡略化して紹介してしまったことで、軽くて簡単な問題として伝わらな点については課題が残る。



(図5.6) 講義で使用したスライド

(出所) 竹端ゼミ



(図7) 講義中の様子

(出所) 井関准教授撮影

#### 4. 学んだこと・今後の課題

私たちが学んだことと今後の課題を述べる。まず、学んだことは大きく2つある。

まず、性はデリケートな話題だけれども、議論すべき（自分の中で考えてみるべき）問題であること。自分がどういう性なのかをわざわざ人と話したり考えたりする機会は多くない。性のあり方についていろいろな人と語り合う事で、もっと自分らしさを深められ、自分が今までどういう生き方をしてきたのか、ぼんやりとしていたものを振り返るきっかけになった。

また、「自分らしさ」は一度考えてはっきりわかるものではなく流動するものであり、考え続けるものであるということだ。講演会でお話を聞いたり、好きなものを振り返ったりしたことで、今の自分と過去の自分で考え方が違うこと、プロジェクトを通して考えが変わってきた。きっと、この3回のプロジェクトだけではまだ知らない自分らしさがあるのだと思う。このプロジェクトをきっかけに、これからも考え続けていく中で、少しずつ自分らしさが見えてきたらなと思う。

本プロジェクトの課題としては、二つ挙げられる。

一つ目は、「多様な性」についていっそう議論を深めるために、より多くの人に参加してもらおうことだ。今回は、ゼミ生以外の学生と「セクシュアリティと自分らしさ」について議論したことで、新たな意見や価値観に出会い、これらのテーマについての興味関心をさらに深めることができた。もっと多くの人に参加してもらうことができれば、より多様な価値観と出会えるだろう。しかし、環境人間学フォーラムの感想には、「興味はあるけれど、やっぱり参加するにはハードルが高い」という声もいくつか見られ、潜在的な需要があることが分かった。そのような思いを持つ人にとっても安心して発言でき、興味のない人さえも巻き込んで考えられるような場をデザインしていきたい。

もう一つは、踏み込みにくいけれどそこを乗り越えて考えたいという気持ちと、踏み込みすぎたら嫌な気持ちになる人もいるよなどという葛藤を乗り越える方法を見つけることだ。企画するうえで、ちょっとした言葉やテーマの選び方など、いろいろな配慮を考えることは必要不可欠であるが、どこまで配慮すべきなのだろうか。配慮しすぎた結果あいまいな表現になってしまうため、そのバランスが難しかった。プロジェクト当日は参加者から自発的に話してくれたエピソードに対し、どのあたりまで深掘りしていいのを見極めるの

にも戸惑ってしまう場面があった。また、自由に発言してよい中で他の人に配慮しながらの発言を両立させるにも配慮が必要だった。嫌な思いをしないために心配りすることと、腫れ物扱いは違う。

セクシュアリティは誰もが平等に持っており、それを馬鹿にすることや自らの価値観を押し付けるのは人権侵害に当たる。今回のプロジェクトを通して学んだことを個人の生活に活かし、また同じテーマでより発展的な内容で学びあう機会を残していきたい。

#### 5. プロジェクトメンバーのコメント

・環境人間学フォーラムへの学生の感想や、プロジェクトを企画するゼミ生の発言の中に、「LGBTQの『方々』」「『私たち』にも関係のある話」というような表現が何度かみられた。この言葉には、「マジョリティの私や周りの友達」と「どこかのマイノリティ」を無意識に分ける壁が表れているように思う。このプロジェクトを通して多くの人がセクシュアリティの話題を自分事にしてくれたが、「教えるのではなく学びあう」という姿勢は、そのような無意識の壁に気付くきっかけにもなったのではないだろうか。セクシュアリティの問題に限らず、多様性を尊重する上でこれからも大事にしたい姿勢だと思った。（加來）

・私はこのプロジェクトを通して、「配慮しようとするのが区別に繋がる」ということに気づいた。センシティブな話だからこそ、みんなが居やすく話しやすい場にしたいと思い、考慮しよう配慮しようとはばかり考えていたけれど、それこそが特別視であり区別だと気づいた。この経験を生かして、これからはマイノリティの人々に限らず友達や家族・初対面の人にも、無意識に張ってしまっている薄い膜のようなものを取り払って接することを心がけたいと思った。（金地）

・プロジェクトを通して、私自身も自分のセクシュアリティや自分らしさに向き合うことができた。診断を通して自分のセクシュアリティを知ること、セクシュアリティや自分らしさについて考えを言語化することも、自分一人ではしなかったと思う。自分らしさに向き合うのは自分自身だけど、みんなで考える場があることで、ハードルが下がりその一歩を踏み出すことができると実感した。これからは自分らしさを自分の中だけで留めず、他者との関わりを大切にしながら少しずつ深めていきたい。そういう場や雰囲気自分を広げていけたらいいなと思う。（狩谷）

・プロジェクトを始める前は「価値観をガラッと変えるぞ!」と意気込んでいたのだが、今では「ありのままに生きる」ためにそのときそのときの自分の気持ちと素直に向き合い尊重していきたいと思えるようになった。もちろん、それは相手に対してもだ。無理矢理自分を変えよう、相手に分かってもらおうとする必要もなければ、相手の考えを必ずしも受け入れなければならないということでもないはず。でも、理解しようと歩み寄ろうとする姿勢がとても大切。そのことに気づけたことでセクシュアリティ問題はもちろん、今後の私の生き方にプラスの影響を与えてくれると、自信を持って言える。(永山)

・僕にとってこのプロジェクトは「セクシュアリティを多様な観点から考えられる場」だった。セクシュアリティを「恋愛観」や「好きなもの」など様々な観点から見たことで、それらの要素が自分の「性」や「らしさ」にどう繋がるのかを考えられた。しかし、他者にとってセクシュアリティを形成する要素や、性をどう捉えるかという観点は自分とは全く違って、変わっていくものでもあるというのが取り組んでいて面白い部分であった。セクシュアリティにおいて自分と他者はどのように違っているのか、その違いを「面白い」と思えることが大切だと僕は思う。(吉田)

## 6. ゼミ教員から

この3年生プロジェクトに、ゼミ教員は殆ど関与していない。プロジェクトメンバーは、何に取り組みたいか、という目標設定から、具体的にどのように行うか、という方法論の設定、そして実際のワークショップや授業でのプレゼンなどの実施、報告書の作成まで、全て自分たちで相談しながら、作り上げていった。ゼミ教員は「なんかしてみない?」ときっかけを作り、「環境人間学フォーラムで発表したら?」「乾先生の授業で講演会があるから出てみたら?」と提案し、「せっかくだからEHCの報告書も書こうよ」と持ちかけただけ、である。質問されたら答える、けど、基本的にはそれ以上のコミットをしなかった。書いてみて改めて気づくのだが、言いつばなし、で、責任は取っていない。

「なんて無責任な!」というお叱りを受けるかもしれない。それは、否定のしようない事実である。でも、少しだけ言い訳をすると、その分、指導教員ではなくプロジェクトメンバーが責任を引き受けてくれた。教師に言われたことを従順にする状態(コンプライアンス)でも、決まっているカリキュラム・

枠組みに熱中して取り組む段階(エンゲージメント)でもなく、自分たちで目標設定をしてそれに向けて試行錯誤していく段階(エンパワメント)だったのだと思う。

上記の視点を与えてくれる文献(スペンサー&ジュリアーニ2020)によると、エンパワメントとは「人間の持つ本来の能力を最大限にまで引き出す」と述べられている。ゼミ生達は、従順に指示待ち状態では何も始まらないことを理解し、指導教員は枠組みも何も提示しないので、自分たちでどんな枠組みや方向性がいいか、をモヤモヤ話し合うことからスタートした。半年間、LINEやZoomやゼミ室などで、数多く話し合いながら、自分たちが納得のいく成果を作り上げた。その中で、自分たちの持つ本来の能力を引き出し、高めていくことが出来たのではないかと思う。

EHCは「大学の資源(知識・技術・マンパワー)をいかし、地域の課題解決や価値の創造に挑戦すること」を目指している。今回の取り組みは、学内に限定されることで、一見すると「地域の課題解決や価値の創造に挑戦すること」に無関係に思われるかもしれない。でも、「セクシュアリティ(性の在り方)と自分らしさ」という課題は、日本社会にとっても本質的に重要な課題である。それを「自分事」として捉え、授業や環境人間学フォーラムなど「大学の資源(知識・技術・マンパワー)をいかし」、企画したワークショップなどを通じて「新たな価値の創造に挑戦」してくれたのではないかなど、指導教員は感じている。それは、中長期的に見れば「地域の課題解決」の担い手育成に繋がっているのではないかと、とも、夢想している。(竹端)

## 【文献】

スペンサー&ジュリアーニ 2020 『あなたの授業が子どもと世界を変える エンパワメントの力』新評論